# 慶長太平記 一

半村良

黄金の巻

# 慶長太平記

半村良

## 一 黄金の巻

文藝春秋

慶長太平記一　黄金の巻

昭和五十三年一月三十日　第一刷

定価　八八〇円

著者　半村　良

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

印刷　凸版印刷

製本　加藤製本

万一、落丁乱丁の際はお取替えいたします

©Ryo Hanmura 1978　Printed in Japan

# 目

# 次

慶長太平記 一　黄金の巻　目次

## 黄金の音

黄金の音／8　美童／34　角倉船／45
夢／58　南蛮語／72

## 黄金の風

作者まえがき／88
奥方／90　横笛／103　道中／117
朝／129　案内役／142　黄金の風／156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

## 黄金の花

作者まえがき／170
名刀／172　敵地の雨／186　黒の魔力／199

## 黄金の沓

国境／212　宗家／224　黄金の沓／238

## 黄金の壁

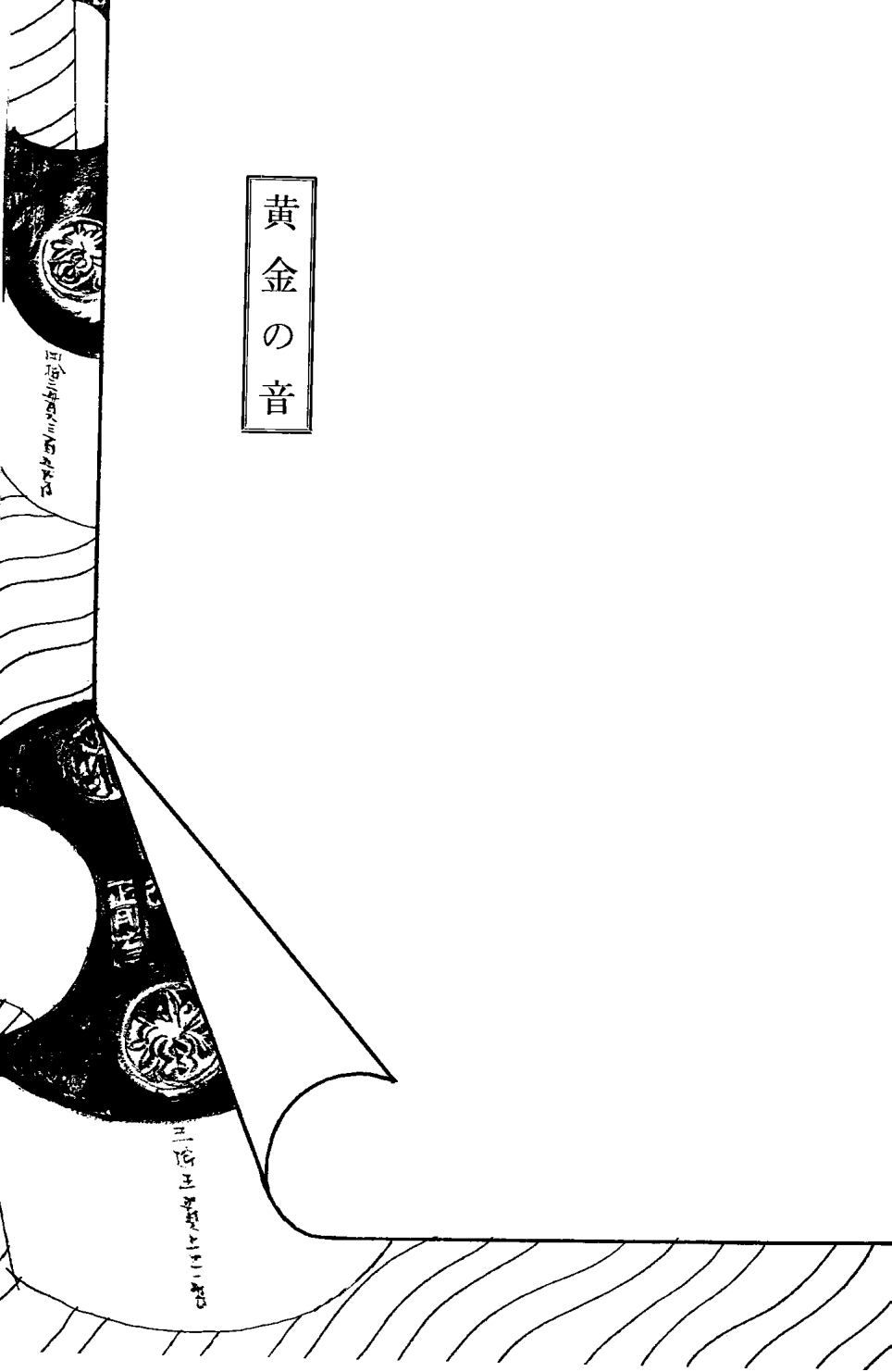
黄金の壁／252　進路／269

装釘・さしえ／堂　昌一

# 慶長太平記　一

## 黄金の巻

# 黄金の音



# 黄金の音

## 一

よく晴れた朝である。時折り風が吹くが、さして強くはなく、葉ずれの音もかろやかである。陽はまだ昇ったばかりで、生い繁った樹々の下生えの草は、しっとりと露に濡れている。

そのあたりは、普段あまり人の来る所ではない。細い道がついてはいるが、ともすれば草に隠れがちだし、両側から木の枝が生え伸びていて、うっかりすると顔や胸に打ちあてかねない。

その細道をゆっくりと登って来る人影がふたつある。見え隠れしてまだはっきりとは判らないが、先に立っているのは武士のようである。山歩きに慣れていると見え、かなりの急坂なのに足どりがひどく軽い。

あとに続くのは樵夫のような風体である。どちらも逞しい体つきをしている。

「見ろ」

先を行く武士が錆びた声で言った。道に張り出したやや太めの枝が一本、生々しい折れ口を朝の光に曝している。

「汐臭い。すぐ行き止りになりましょう」

あとの男が言った。

登るにつれ、木の生え方がまばらになり、しかも丈が低くなりはじめていた。そのかわりごつごつした岩が目立ち、その間にひねこびた形の松が点々と生えている。

やがて道がおわった。そこで山は削いだように切れ、海へ落ち込んでいる。海は二人の正面に涯てもなくひろがり、眩しく光っていた。

二人は言い合わせたように崖の突端に立って沖を眺めた。すぐ左下に小さな村がひとかたまりあって、六、七艘の漁船がその村の浜へ櫂ぎ戻って行くところだった。

「見えませぬな」

武士はそう言われて首を左右に振った。

「夜のうちに遠のいたのだろう」

二人の喋り方はひどく不明瞭である。少し離れれば殆ど内容が聞きとれない。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ゆうべたしかにこのあたりへ南蛮船が来ていたはずだ」
武士はそう言うと急に体をまわし、海に背を向けて土の上を調べはじめた。樵夫姿の男も十歩ほど右へ移って崖の上を調べはじめる。
「あった。ありましたぞ」
目あてのものを、樵夫のほうが先に見つけたようだ。
「たしかに焚火のあとです」
緊張した早口で武士に告げ、石ころだらけの地面に片膝をついて黒い焚火のあとへ手を入れて見ている。
「大きな焚火だ」
武士はそのほうへ近寄りながら、からかうように言った。
「しっかりと石を組んで、炉のように作ってありますぞ」
「底を調べて見ろ」
樵夫姿の男はそう言われて焚火のあとを手で掘り返しはじめた。
「なるほど、一度ではありませぬな」
「そうか」
武士が頷く。
「間違いありませぬ。少くとも五遍や六遍は火を焚いています」
「お主がそう見るなら間違いはなかろう。しかし、焚火の燃えがらを持ち帰っても証拠にはならぬ」
「しかし、これはたしかに南蛮船を迎える合図に焚かれた火の跡でしょう」
「証拠にはならぬと言っている」
武士は不機嫌な顔になった。
「たしかな証人になる者を探し出し、連れ戻らねばならぬ」
樵夫姿の男は立ちあがり、崖の下をのぞくようにして言った。
「あの村の者が知っていましょう」
「さあ、どうかな。これほどの秘事だ。そうやすやすと人に知られるようなことはすまい」
武士は腕を組み、焚火のあとを見おろしていた。
「だが、俺にとってはこれで充分だ。次の積出しがあるにしても、まだかなり間があるはずだ。じっくりと網を張ることにしよう」
「南蛮船と、いったいどうやって連絡をとり合っているのでしょうか」
「判らぬ。判らぬが、その気になればいくらでも方法はあ

ろう。大坂方に加担してひと儲けたくらむ商人もいようし、西国には切支丹大名も多い」
武士はそう言って唇を歪めた。

## 二

人数を集めよ。樵夫姿の男は武士にそう命じられると、驚くべき快足でその崖の上から南の山中へ消えた。武士は来た時と同じようなゆったりとした足どりで細い道を下り、途中からそれよりやや広い道へ出ると、崖下の村へ近付いて行った。
何者かは知らぬまま、時々行き違う百姓達がその武士に頭をさげている。何となく、無視していい相手だとは思えないのだろう。年は三十二、三か。かぶりものもなく、陽焼けした顔を挨拶されるたびかすかに柔らげている。
道はやがて民家の間へ入り込み、すぐ浜へ出る。
「ちと尋ねたいが、ここは何と言う村か」
半農半漁の貧村である。さっき崖の上で見た漁船がすぐまぢかに迫っていて、武士はそれを迎えに出ている女たちの一人に訊いた。
「鈴波……」
訊かれた女は胡散臭そうに答えたが、相手の柔和な笑顔にすぐ警戒心を解いたようだった。
「名前だけ聞いたら、こんな貧乏村だとは思わないだろうね」
ひと句切りごとに尻上りになるこの辺りの訛りで女は言い、近くの仲間と笑い合った。
「名前だけでも美しいに越したことはない」
武士は岸へ寄って来る船を見ながら言った。
「お侍さまはこの辺りのお人じゃないね」
「判るか」
「そりゃ、言葉が違うから」
「儂は美濃の生まれだ」
「道理で。それじゃ、近頃お召し抱えになった人かね」
「うん。不案内の土地ゆえ、こうして見てまわっているのだ」
「殿様がどなたになっても、この辺りは少しも変らないよ」
「そうか」
「前の青木様はどこへ落ちなさったのかね。知っていたら教えてもらいたいもんだ」

「前の領主が懐しいか」
「とんでもない。ただ、いくさに負けなさったら、お侍さまはどういうことになりなさるのかと思ってね」
「儂も知らん。人のことどころではなかったからな」
「ははあ、そうするとお侍さまも西方に付きなすったね。そりゃ運のいいお方だ。新しい殿様に召し抱えられたんだからね」
武士が関ヶ原のたたかいに加わったと知って、女たちは好奇の目でみつめた。
「とにかくこうして生きている。日頃の心がけがいいからだ」
女たちはわっと笑った。
「それにしても、ここは来るのに骨が折れる土地だな。途中で道に迷って野宿をしてしまった」
「道理でこんな朝早く……」
女たちは気の毒そうな目になった。
「このような村では、余り人が来ることもなかろう」
「そうでもないよ。でも、山を越えて来る者はいないね。たいてい舟だよ」
「そうか、舟で来るか」
「でも、それも月に一度くらいか……そうだ、そう言えばこのふた月ほど、誰も来ないようだ」
女たちはその武士に巧みに訊き出されている。当人たちがそれと気付かぬだけに、嘘は言っていない筈であった。
やがて粗い石積みの突堤の内側へ漁船が入り、女たちはわらわらと岸へ駆けて行った。
武士はそれを見物するようなしないような、ごくさりげない態度でその浜から遠のいて行った。
ひそかに大坂から運び出された荷は、この村のすぐとなりの入江から小舟を使って沖の南蛮船に送られたのだろう。そして土地の女たちが言ったように、関係者はすぐその小舟でどこかへ散って行ったようだ。
彼にはその南蛮船が、いったいどの国の船であるのか、まだ見当がついていない。一応はポルトガル船だと考えているのだが、それにしては少し筋の通らない部分もある。去年の暮れ、肥前の切支丹大名有馬晴信が、ポルトガル船を焼打ちしているからだ。
このことの裏には必ず切支丹大名がいる。……そう確信し、ことに有馬晴信に目星をつけているだけに、余計迷ってしまうのだった。

だが、何としても証拠は摑まねばならない。単なる臆測ではとうてい家康に信じさせることはできないだろう。何しろ事が大きすぎるのだ。太閤秀吉亡き今、大坂方でこれほどのことを考えつく者がいたのだろうか……彼はまたしても舌を巻く思いになった。

## 三

鈴波と言うその村の西のはずれに、小さな神社がある。武士は浜ぞいの道から少し山側へ入り込んで、その神社のほうへ歩いて行く。どの家も魚を乾していて、村中が生臭かった。

神社は山の中腹にある。さっきその武士がいた山は、村をはさんで神社がある山と向き合うかたちになっている。

浜の女たちはこの二カ月ほど他所者は誰も来ないと言ったが、実はゆうべ遅くに村へ入りこんだ男が一人いる。もっともまだ朝早いし、他所者とは言えない男だから、女たちが知っていて隠したわけではない。

「お婆、あの侍は誰だ」

年は二十五、六だろう。家の前の小川へおりる石段の途中で言った。帯に手拭をはさんでいる所を見ると、顔を洗いに出て来たらしい。その下では老婆が菜を洗っていた。

「知らぬな」

老婆は体を起し、前の道を見て答えた。

「強そうな侍だ。いくさ慣れをしているぞ」

「ほう、お前もそういうことが判るようになったのか」

「ああいうのが寄せて来たら逃げ出すのが一番だ。そういうことが判らなくては生きのびられない」

「そのような危い思いばかりしていたのだな」

男は老婆の孫にあたるらしい。老婆の口ぶりは叱るというより怨むようだった。

「十七の年に家を飛び出して、十年も戻らなかった。もう友吉は死んだと思っていたのだぞ」

老婆は孫の友吉に優しい返事を期待しているようであった。案ずるな、もう俺はどこへも行きはしない……そんな言葉が聞きたかったのであろう。

しかし、友吉の表情は急に嶮しくなっていた。遠のいて行く武士の後姿を、きつく眉を寄せて見送っている。

「まさか……」

そうつぶやくと、おりかけた石段を足早に駆けあがった。

「これ、どこへ行くのだ」

老婆が叫んだ。友吉はちらりと振り返り、
「どこへも行きはしない」
と、なだめるような笑顔を見せると、帯に手拭をはさんだまま、短い着物から臑を蹴り出して武士のあとを追いはじめた。
「これ友吉。友吉……」
老婆がうろたえてよたよたと石段をあがると、その声を聞きつけて五十がらみの男が家の中から出て来た。
「お婆、何の騒ぎだ」
「友吉がまた行ってしまった」
老婆は泣き出しそうに告げる。
「起きぬけのあの服装でどこへ行くものか」
男は苦笑していた。友吉の父親らしい。
「友吉はもう立派な一人だちの男だ。どこかへ行くにせよ行かぬにせよ、お婆を泣かせるようなことはしないはずだ」
「そうだろうか」
「一時は家の者に心配もさせたが、白刃や鉄砲玉の中をくぐり抜けて来ただけのことはあったようだ。あれだけの銭を稼いで戻ったではないか。今ではもう兄よりよほどしっかりしている」
父親は友吉が去ったほうを、目を細くして眺めながら言った。
「その大層もない銭が心配の種だ」
老婆は心配でたまらぬらしかった。

## 四

その道は神社でおわっていた。神社から先は道とは言えぬほどのかすかなものになってしまう。それに、神社と言っても別に神主がいるわけではない。年に一度の祭りのためにあるような小さな社で、鳥居なども汐風のために朽ちはじめている。
杉、樫、松などの木が入りまじった森の中の小暗い道を、あの武士が登って行く。友吉はいつの間にか横手の森の中へ入り込み、静かにそのあとをつけていた。久しぶりだが、友吉にとっては知り抜いた土地である。だからその尾行には自信があって、よくその辺りで遊んだ子供の頃のことを思い泛べるゆとりさえあった。
友吉が十七の時に大きないくさが起った。関ヶ原の合戦である。大いくさになりそうだと聞いて、友吉は熱に浮か

されたようになってしまった。知合いの男に頼み込んで、領主青木一矩の軍に足軽として加わり、その大いくさの場に出た。当時の友吉にとっては、西方も東方もなかった。合戦という言葉を聞いただけで胸が躍り、それに参加できなければ生きている甲斐もないように思っていた。

青木一矩は北ノ庄の城主であったが、加賀、能登の前田勢が越前金津まで出て来ると、敦賀から大谷勢が大挙して来援、入城した。その時はもう、西方が勝ったような騒ぎだった。明日にでも西方の大軍が船で加賀のどこかへ乗り込むという噂が流れ、そのために前田勢はなすところもなく自領へ引きあげてしまったからである。

だが、そのあと事態が急変し、大谷勢は石田三成の急使を受けて関ヶ原へ発った。友吉は青木勢が北ノ庄に留め置かれて北陸路の支えにされそうだと聞くと、強引に大谷勢の中へもぐり込んで北ノ庄をあとにした。

いくさとは、兵がやたらに歩かされるものであった。関ヶ原へついてからも友吉たちはのべつ移動ばかりしていた。しかし、友吉は友吉なりに充実した時を過ごしたのだ。異様な姿をした大谷吉継を何度も見ることができたし、脇坂、朽木、小川、赤座と言った西方諸将の姿も遠くからではあるが見ることができた。一人前の顔をして女も買い、白い飯を食い放題に食いもした。度重なる小競合の中で生きのびるすべも覚えたし、声かぎりおめいている内に酔ったようになって、何も考えずに敵に駆け寄って行けるものだということも知った。

それに、汚いやりかたも教えられた。ことに大谷勢にはこまかな指示がよく出され、たとえばいよいよとなった時、前面の敵の大将の名を教え込まれるのだ。

「お前たちは悲しげな声で敵の大将の名を呼べ。残りの者はその大将が討死なされたと叫べ」

混戦になると、そんな欺しが案外通じるようだった。そのために敵の勢いがおとろえて、一町も二町も余計に押し出せたこともある。

だが、結局は敗け、大谷吉継は自害してしまったのである。しかし、だからと言って友吉は鈴波村へ逃げ戻る気にはなれなかった。広い世界で生きることの楽しさを知ってしまったのだ。しかもいくさはそれきりというわけではなく、大坂方はますます兵を必要としていた。

友吉は混乱した世間を渡り歩いているうち、いつの間にか足軽ではなくなっていた。名をそれらしく鈴波友右衛門



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com